

# 地理空間の特質と概念規定

フィリップ・パンシュメル

手塚章訳

I はしがき

II 地理空間の本質

II-1 連続的、有限、一体的、実体的な空間

II-2 地理空間、人文空間、人文化された空間

III 地域組織、構造、システム

IV 結論：環境、地域組織から地理へ？

## I はしがき

伝統地理学の「環境」(milieu)という概念に対して、空間という概念が地理学を席卷したことは、それを契機として、本質論的な考察を展開する機会でありえたし、またそのような機会とすべきでもあった。しかし、表面的にはそれらしく見えたものの、実際の展開はそうようには進まなかった。事態は全く逆であって、地理学者は空間概念という旗を振り回すことによって、他の社会科学が身にまとっている新しさに、みずからも組みしうると考え、また伝統地理学のマイナスのイメージからみずからを解放できると考えた。同時に、空間という概念は、地理学の内容に関する考察から地理学者を解放するものとみなされた。この点に関して、地理学における空間概念の歴史は、決して前例のないことではなく、地理学を定義し、位置づけるべきどのような概念をもすべて拒否し続けてきた地理学史のひとこまにすぎない。景観、地域、さらには自然環境といった概念のたどった歴史が、空間についても繰り返されている。空間という用語は、綿密な概念的分析をへることなしに受容され、用いられている。他方、空間という語は、その使い途がきわめて広いために、重宝がられ、使われすぎてきている。そしてこのことが、地理学の領域を広げているとともに、その内容に関する考察を怠らせている。

なぜなら、地理学を「空間の科学」と定義したり、地理学独自の対象として、「人間による空間の整備」とか「空間における社会の研究」とか「社会の空間組織」とかを想定することは、実は全く地理学の定義をしたことにはならないからである。地表に存在するあらゆるものは、それぞれ具体的な位置を有しており、また絶対的にも相対的にも位置づけられているため、必然的に「空間的」特性をそなえている。空間概念を軸とする地理学のこのような考え方は、決して新しいものではない。それは、今世紀初頭のアングロサクソン諸国における考え方と共通しており、ハーツホーンがその大著 *The Nature of Geography* で主張した、分布の科学、地表空間の分化の科学としての地理学という考え方に対応している。

あらゆる現象が空間的側面を有していることから、空間的特性を分析するために、それに特有な手法を用いることは当然である。このような手法は不適切にも地理的手法と呼ばれているが、実際には地図的手法なのである。「地図化しうるものはすべて地理的である」という、かの有名な言葉を思い

出していただきたい。このような方法論的基盤に立脚して、独立の科学が成立しうるはずはないし、また地理学の自立が保障されることも決してありえない。せいぜいのところ、このような立場は、あらゆる学問分野の研究者に対して、その研究対象の地理的な属性や空間的側面を無視したりすることのないように、啓蒙し宣伝する役割を地理学者に与えるにすぎないであろう。また、空間という言葉の用語法に関する重要な問題点は、空間、地理空間、空間組織などといった概念の中身について、地理学者相互の間になんらの一致がみられないことである。このような状況のもとでは、コミュニケーションは困難であり、錯覚をもたらしかつ危険でさえある。空間という言葉を活字で読んだり、耳で聞いたりする際に、各人は各様の意味で理解している。表面的には、同じ言葉が使われているということで、そこに共通の理解が存在しているように見えるが、現実問題としてはそのようにはなっていないのである。したがって、空間という概念に対して、その内容についてや、また空間概念が地理学に貢献しうるポテンシャルに関して、いまだなんら真剣な検討がなされないうちに、すでにこれを拒否しようとしたり、これを乗り越えようとしたりする動きがみられるとしても、それは全く驚くにはあたらないことといえよう。

## II 地理空間の本質

空間という語が、地理学者によって用いられ、「地理空間」という複合語として用いられ、または空間という言葉のもちうる意味について考察することは、きわめて重要なことである（たとえば、地理学者にとっての空間の意味が、経済空間や社会空間のそれとなんら変わるところがないならば、地理空間について語る必要はみじんもないことになる）。今回の手短かな発表では、哲学における空間や経済学者の空間には触れずに、もっぱら地理学研究において空間という概念が、どのような点で貢献することができるか、またどのような点で従来みられなかった新しさを地理学に提供しうるかを、経験に基づいて具体的に考えることにしたい。

### II-1 連続的、有限、一体的、実体的な空間

空間という語が地理学において用いられる時、まず第一に明確にしておかねばならないことは、それが地表空間を意味している、すなわち地球表面の一属性を表わしているということである。地表と不可分である地理空間は、それゆえ幾何空間と同じく連続的である。幾何空間と異なるのは、地理空間が有限であり、きりがある点である。また地理空間は、あらゆる地表現象がすべてそこに刻み込まれているという意味において、一体的である。地理空間の最も重要な特性はこの一体性であって、これが他の諸科学における空間の多重性ときわだったコントラストをなしている。人間社会が、数百年来あるいは数千年来、生活を営んできたのは、この一体的な地表空間であるわけだし、人間社会が変化させ、整備し、人文化に努めてきた対象もこの地表空間である。

変化、整備、人文化といったこれらの言葉は、一方で、地理空間がはたして内実をそなえた具体的な実体であるや否やという、地理学の核心に触れる論争とも関係している。この論争においては、人類によって地表に作り出されたもの、刻みつけられたものすべてが地理空間を構成しているという考

え方と、これに対して、可視的な現象の分布の受け皿としての役割をはたす、「うつわ」としての空間という考え方が対立している。ここで、後者の考え方における空間は、二次的な空間、すなわち実体的な地理空間から「派生」した空間に他ならない。

地理学における多くの研究が、このような考え方、すなわち、ちらばりや分布などといった「空間の様相」を表現するためのうつわとしての空間という考え方に基づいて行われている。しかし、そのような空間を地理空間と呼ぶことができるだろうか。そうではなくて、むしろ、地理空間とは、直接観察することのできる実体から構成されている、具体的な空間として考えるべきではないだろうか。地理空間を構成しているこれらの実体こそ、人口、経済、社会、政治、文化などの諸現象の、地理的な表現であり、記述であり、反映であり、写像であり、具象化なのである。

## II-2 地理空間、人文空間、人文化された空間

上に述べたような地理空間の特性は、地理空間の性質の一面のみを示すものであって、それらだけでは地理空間の定義として全く不十分なものでしかない。実際、地理空間が地表空間であることから生ずるこれらの特性に先んじて、より基本的な別の問いが存在する。すなわち、地理空間は地表における人間居住と無関係であるのか、それともこのような地表の人文化の結果として生じたものであるのか、という問題である。

たとえば、他の惑星のように、人間の存在しない土地を考えてみよう。そこにおいては異なったさまざまな自然環境もしくはさまざまなエコシステムへの地域分化がみられる。これらのエコシステムに植物群や動物群が含まれている場合、これらの生物群は環境を構成する要素であるのはもちろんだが、同時にこれらの生物群が、ある意味において、空間を「組織している」と言うこともできる。一本一本の樹木の根網の到達圏や動物の移動領域などは、このような組織化の例となろう。それゆえ、「空間」は、そこに生き、そこで繁殖する生物が存在することによって初めて生ずる。もっとも、これらの生物群は環境に従属しており、環境の規定から抜け出すことはできない。その生息域や土地占居の形態は、本能的な行動や、物理・化学的なメカニズムによって規定されている。しかし、それでもこれらの生物が存在することによって、生物の存在と結びついた空間という観点から、自然環境を分析することができる。

人間社会の存在は、これとは全く性格の異なった地理空間を生み出す。人類の存在以前においては、自然環境や範囲や領域などが存在しただけで、空間は存在しなかったともいえる。地理空間は、以下に述べるような、人間による三つの作用によって初めて生ずるのである。

(a) 認識行為と命名行為——人類が地表に存在することによって生じた第一の効果は、地表の構成要素を同定し、認識することによって、地表を無名の闇から引き出したことである。ギュスドルフが地理学の定義にさいして「土地の知的所有」と適確に表現したこのような第一番目の地理的行為は、実際には地名の命名行為によって表現される。人類は、土地に名前を与えることによって、その土地を自己のものとし、自己に従属させる。かくして、人間の意志と空想に応じて土地は地名でおおわれる。地名が存在することにより、同定の手がかりができ、心の中（次いで地図上）に表現が可能とな

り、さらには地理学の基盤であると同時にあらゆる行為の基盤でもある位置に関する知識の伝達が保証される。

それゆえ、地理空間の第一次の骨格は地名の分布とともに現れる。この地名による三角点網によって、人は自己の位置を把握し、移動し、場所を区別し、場所になじむことが可能となる。地名の分布はまた、地区や小字の名称から国家の名称、さらには大陸名称にいたるまで、階層的な構造を示す地名群からなる相対空間を出現させる。

(b) 地表に尺度基準をもちこみ、土地を分割区分する行為——人間がただ存在するというだけで、周囲の事物にはすべて相対的な価値が与えられる。まさに「人間は万物の尺度」なのである。あらゆるものは、人間固有のスケールに応じて、また人間の能力（視野の広さ、歩く速さ、一日にできる農業労働の量、一回で輸送できる重量など）に対応して、場所を占め、位置づけられ、評価される。地表に存在する事物はそれぞれの立地位置をもつが、それが大きかったり、小さかったり、近かったり遠かったりするのとは、人間という尺度にてらした結果である。したがって、人文空間である地理空間はすぐれて相対的な空間である。

地表のこのような尺度づけにおいて、決定的な役割を演ずるのが時間である。農地一筆の大きさ、家から耕地までの距離、村落の配置や都市の配置は、時間距離、時間面積に応じて決められる。このような尺度基準が、集落網の規則性や影響圏・勢力圏の階層性の基盤をなしている。

(c) 空間を組織化する行為——人間によるこの三番目の行為は、地理空間形成のプロセスにおいて最も重要である。それが一人の人間であれ、もしくは複数からなる集団であれ、人間がある場所に存在するというだけで、そこがまわりの中心となり、周囲の空間はすべて中心に向かって指向し、分化し、配列される。一人の人間を中心とした場合、まわりの事物はすべて、前にあるか、後ろにあるか、右か左か、近くにあるか遠くにあるかなのである。たしかに、方位や経緯度などによって、地点を絶対的な座標軸に位置づけることは可能だが、実際には、人間を中心とした相対的な位置づけによって、地理空間は作り上げられている。

農家はその経営耕地を家の周囲にまとめて持っていたり、分散して持っていたりするが、分散している場合においても、家からの距離は往復の費用の点から限られている。村の領域は、核を中心として組織化された空間をよく表わしている。そこでは、生産者である農家によって利用空間が規定されている。都市に住んでいない都市就業人口は、ある程度の距離を通勤するわけであるが、その時間距離は通勤のための費用と時間の点から規定される。さらに、別の考察レベルにおいても、たとえば土地の使用価値、土地利用の集約度、人口密度などは、必ずひとつの中心、ひとつの核を中心として分化し、配列されている。核を中心とする組織化現象は、環境固有の性質とは全く異なる特性をその場所に対して与える。このような特性は、まさに空間的特性と呼ぶにふさわしい。すなわち、中心性、遠隔性、近接性、周辺性などの特性がこれにあたる。もともとモザイク状に地域分化している環境は、このような作用の結果、さらにリング状や同心円状に細かく分化することになる。

場所の同定、空間の尺度づけ、核を中心とする空間の組織化という、人間存在から生ずるこれら三

つの特性を十分考慮することによって初めて、地理空間の概念はその有効性を獲得することができるし、また、環境という概念に対する対立概念となることができる。

自然環境としての狭義の環境は、空間とは異なった、それ固有の地域分化の論理に立脚している。地質、高度、傾斜、向き、さらにはまた、気圏、水圏、岩圏、生物圏などの相互間にみられるあらゆる連関のプロセスが、環境の地域分化を規定している。人類がこれらの自然環境に手を加えるようになってからも、自然環境のモザイクは、人間による地表の改変のあり方を規定し、方向づけてきた。このようなことから、地理学においても、初期のうちは環境という観点が強調され、地理空間という観点が無視されたのである。

農村地理学の歴史は、これら二つの観点の強弱をはっきり示している。農村景観、耕地形態、土地利用などに関する研究の重点は、ほとんどの場合、自然条件との関係の分析におかれていたのであり、空間や距離や行動圏などとの関係に重点をおいた研究はきわめて少ない。耕地形態は、農舎との位置関係を抜きにして論じられ、また農村集落は、形態論的な記述が中心で、集落の配置やモザイクについての分析はなされなかった。さらに、道路網については、研究が事実上全くなされてこなかった。しかし、近代地理学の発展が、19世紀の支配的潮流であった自然主義、実証主義、決定論的思考に端を発することを考えると、環境論的観点を重視したこのような傾向は、きわめて当然な帰結でもあった。

### III 地域組織、構造、システム

人間による三つの行為（同定、尺度づけ、組織化）は、人間による地表の改変行為であり、地表を整備する行為である。これらの行為を地理的行為と呼ぶこともできようが、しかし、そのためには地理的という言葉にきわめて限定的かつ特殊な意味づけを与えることが必要となる。実際には、地理的という言葉はきわめて広い意味で用いられており、それゆえ、われわれは地理的という言葉のかわりにひとつの新しい言葉（地域組織、*géonomie*）を用いることを提案したい。もっとも、この言葉自体は、すでに30年以上前から存在していた。1947年に都市計画学者のモーリス・フランソワ・ルージュは、空間組織に関する科学という意味でこの言葉を提案した。当時、この言葉は全く普及しなかった。実際、地域組織論（*géonomie*）を人文地理学や都市計画と異なった学問として認識することは困難であった。しかし、この言葉には、再び使用するにたるだけの価値があるように思われる。この言葉は、地理学以上に、土地に対する人間の積極的かつ規範的な行為をうまく表わしている。

分析の出発点として、われわれはまず五つの地域組織行為のタイプを区別したい。これら五つのタイプの地域組織行為は、自然環境の改変にあたって、地域組織の五つの構造を出現させる。

(1) 居住の構造。集落の分布としてとらえられる。これらの集落があらゆる組織化プロセスの核として作用する。

(2) 土地所有の構造。土地の分割、占居、支配などの基本的な要素。

(3) 土地利用の構造。

(4) 土地管理の構造。行政組織、政治組織としてとらえられる。これらは、国家や民族や集団によ

る地表の所有形態、支配形態を反映している。土地管理に基づく空間モザイクは、たとえば市場の勢力圏モザイクなどよりも、永続的であり、基本的である。

(5) コミュニケーションの構造。上の四つの構造の存続を支えているコミュニケーション・ネットワークがこれにあたる。

これら五つの地域組織構造は、もちろん相互に独立ではなく、互いに補完しあっており全面的な相互作用のもとにある。これら五つの空間構造を重層的にとらえた時に初めて、全体的な地域組織システムが出現する。

これらの構造やシステムに対して、地理学者は従来きわめて均等ならざる関心を注いできた。時期によっても所によっても、強い関心のもたれる対象はまちまちであった。ある学派は土地所有の構造を重要な研究課題としているのに、他の学派ではそのような研究が全く無視されていたり、また、ある学派ではそれが一貫した研究対象であり続けているのに、他の学派では一時的に研究された程度にすぎない、などなど。さらに驚くべきこととしては、行政の構造とコミュニケーションの構造がこれまで比較的無視されてきたということがある。また、農村の地域組織システムにしても、これまで全体的な視点からはほとんど考察されていない。すなわち、集落、耕地、道路網、行政域や経済圏の地域モザイクなどを総合的に考察するアプローチは、従来ほとんどとられてこなかったのである。

しかし、これらの地域組織システムがあればこそ、社会の正常な運営が可能となるわけであるし、またそれらのシステムにのっとって社会は自然環境を改変しているわけである。地域組織構造はエコシステムの人間による改変の表現に他ならない。社会と自然環境との関係は決して直接的なものではない。その中間には、環境パーセプションや地域組織モデルを通じて行われる環境の評価という地理的媒介項が存在している。そして、その評価の内容が、上で述べたような地域組織行為として現れるのである。

#### IV 結論：環境、地域組織から地理へ？

ニュー・ジェオグラフィーは、地理学に空間概念を導入したという点で、高く評価されねばならない。しかし、導入された空間概念は、その発展のいきさつからきわめて経済的色彩の強いものであった。このために、最近 20 年間、「新しい」地理学者たちによって示されてきた空間は、地理空間の定義に十分にたえるものとなっていない。

(1) 経済的色彩が強いために、市場の空間や経済的流動の空間ばかりが強調されて、行政空間や土地所有空間が無視されている。

(2) 扱われている空間の多くが線の空間であり、そこでは、距離に関連した現象ばかりが強調され、反対に、空間を「満たしている」面的事象が軽視されている。しかし現実にはフローやネットワークというものは、そこを流れる財や人間を供給してくれる面的領域なしには意味をもちえないものである。

(3) 分析の対象となる空間が、多くの場合高次の組織空間であることから、たとえば農村の細かい道路網とか農家や農村集落の分布といった低次の空間が無視されてしまっている。

このような欠陥やアンバランスはあるものの、空間概念が導入されたことによって地理学が以前よりも均衡のとれたものとなっていることは確かである。しかし、振り子をいつまでも空間の側に片寄せたままにしておくことは、もはや止めるべきであろう。なぜなら、地理空間の分析において、環境と空間を対置すること、すなわち、自然環境と地理空間を厳密に分離しようとすることは不毛な努力だからである。

現実の地表は、環境と空間というこれら二つの要素の総合されたものに他ならない。人類による自然環境の改変は、たしかに地域組織システムや地域組織構造の成立を自動的に意味している。しかし、これらの地域組織構造を分析したり、解釈したりするさいに、環境を全く無視してしまうことは不可能である。なぜなら、それぞれの地域の地域組織構造はそれぞれ異なった自然環境のもとで作られ、それゆえ、その地方固有の環境条件によって必然的に変化をこうむり、ゆがめられているからである。環境を無視できない第二の理由は、地域組織構造のタイプが、あらゆる人間社会に共通ではないからである。文化が異なり、文明が異なり、社会が異なれば、地域組織構造のタイプも当然相互に異なり、多様化する。

これまで環境と空間を区別してきたのは、分析的考察の手順として必要であったためと説明の便宜のためなのであり、それらの目的が達せられた後においては、これら二つの概念を再び総合する努力が必要である。実際、社会と環境との直接的な関係などということは存在しないし、また社会と空間との関係などというものも存在しない。環境との関係は、地域組織構造という中間項を通してのみ成立しているものであるし、逆に、これらの地域組織構造は、現実には、環境パーセプションや環境イメージなどを通じて、環境条件による影響を強くこうむっている。

それゆえ、地理空間は、環境と空間という互いに異なっているが相互に補完的なこれら二つの概念が、総合された結果として出現するものである。すなわち、地理空間は、生態的環境と地域組織空間の、統合的な表現なのである。換言すれば、人間社会の地域組織行為の結果、名前がつけられ、尺度づけがなされ、組織化の行われた、すなわち人間によって改変させられた自然環境に対応する概念が、地理空間なのである。

(訳者注) 本訳文のテキストは、1980年9月16日に筑波大学において行われたパンシュメル教授の講演会に際して、訳者に手渡されたタイプ原稿である。実際の講演においては、時間の制約もあって約三分の一の分量が削られたが、本訳文では原稿全文を訳出した。原題は *De l'espace des géographes à l'espace géographique—reflection sur un concept* であるが、内容に即して表題のごとく改めた。なお、この仏文原稿は Frans DUSSART 教授記念論文集 *Recherches de géographie rurale* のために作成された原稿を、一部手直したものであることを付記しておくたい。

Ces pages ont été publiées, pour l'essentiel, sous le titre: A PROPOS DE L'ESPACE GEOGRAPHIQUE: L'ECOLOGIQUE, LE GEONOMIQUE, LE GEOGRAPHIQUE, dans: RECHERCHES DE GEOGRAPHIE RURALE, HOMMAGE AU PROFESSEUR FRANS DUSSART, Liège, tome II, pp. 1073-1082 (Numéro hors-série du Bulletin de la Société géographique de Liège).